

第二講 コリントス戦争前夜のギリシア世界（前 396~5 年）

錯綜する国際関係

地域紛争：ロクリスとフォーキスの領土紛争（よくあるパターン）

同盟関係：フォーキスとスパルタの同盟関係

ロクリスとテーバイの同盟関係

ポリス内の党派的利害：テーバイ・・イスメニアス派とコイラタダス派

スパルタ・・・アゲシラオスとリュサンドロス

利害の対立：イスメニアス派・・・ポリスをスパルタとの戦争を画策

リュサンドロス・・・対テーバイ戦で勝利をつかみ、失地回復を目指す

国際場裏における力学

ペルシア・・・小アジアにおけるスパルタの圧力の軽減・排除

アテナイ・・・海上帝国への希求

コリントス・・・民主派のスパルタに対する警戒心

アルゴス・・・ペロポネソスにおける覇権の掌握

マンティネイア・・・アルカディアにおける覇権と民主派の権力確保

エーリス・・・南部領土の回復と民主政

テーバイ・・・ボイオティアにおける覇権の確保とイスメニアス派支配の安定

オルコメノス・テーバイの脅威に対する安全保障の確保と寡頭派体制と寡頭派

コリントス戦争への道

＝戦後体制の崩壊

Esp. パウサニアス王戦後構想の崩壊

フォーキスとロクリスの紛争

ロクリス軍のフォーキス領侵攻

テーバイによるフォーキスへの働きかけ

であると認めていたのである、というのはギリシアを支配しているラケダイモン人に対して戦争するようにテーバイ人もその他のボイオティア人も決して言いくるめられないだろうからである、それであらゆる手段を通して自ら戦争へと導いていこうとして、次のような事情が対立の原因であったので、フォキス人の一部の人々をヘスペリアと呼ばれるロクリスに侵入するよう説き伏せたのである。(3) これらの諸部族にはパルナッソス山付近に紛争地があり、これをめぐって以前から戦争を繰り返してきており、フォキス人、ロクリス人それぞれがしばしば相手側の土地で家畜に草を食わせてきたが、昔からもしどちらかの側がたまたま見つけると、もう一方の側が多数集まって家畜を奪い取ったのである。以前はこのようなことの多くがどちらか一方の側から引き起こされたとしても、常に互いに裁判や話し合いによって解決してきたのであるが、今回はロクリス人が失った家畜のかわりに略奪し返したのでフォキス人は直ちに、アンドロクレイダスとイスメニアス派の人々が仕向けた例の人々が彼らを煽り立てたので、武器を携えてロクリスに侵入したのであった。(4) 国土を荒らされたロクリス人はボイオティア人のもとに使節団を派遣してフォキス人を弾劾し、彼らに援軍を要求したのであった。というのは昔から彼らに対して友好的であったからである。好機を手に入れて喜んだイスメニアスとアンドロクレイダス派の人々はロクリス人に援軍を派遣するようボイオティア人を説得したのであった。フォキス人はテーバイからの知らせが彼らのもとにもたらされると再びロクリスから後退し、使節団を直ちにラケダイモン人のもとに派遣し彼らがボイオティア人に彼らの領土に入り込むのを禁止するよう要求したのであった。例え彼らを信用できないと思っていると言っていたとしても、それにも拘らず使節を派遣して、ボイオティア人がフォキス人に対して戦争を始めるのを許さないと、もし何らかの不正を被っていると見なす場合には、同盟諸国の面前で償いをするよう命じたのであった。彼らを煽りたてそのような欺瞞と厄介事を企んでいた人々は、ラケダイモン人の使節らを何も為し得ないまま送り返し、自身は武器を取ってフォキス人に向かって進攻したのであった。(5) 彼らは急いでフォキスへ侵入し、パラポタミアイやダウリス、ファノテウスの領土を略奪し、町を攻撃しようとしたのであった。そしてダウリスに再び接近し

たが何事も為し得ないまま退却したが、僅かな打撃を被ったが、ファノテウスの郊外を強引に占拠した。それを手に入れた後彼らはフォキスへと前進して、エラティア及びペディエエア付近の平野の一部とそこに住む人々を蹂躪して撤退していった。彼らがヒュアンポリスから撤退する途中で彼らはこの都市を攻撃する決定を下した。しかしその地点はかなり強力であった。市壁に向かって攻撃し熱意に欠けるところはなかったが何も成し得ず、兵士のうち 80 名を失って再び退却したのであった。ボイオティア人は以上のようにフォキス人に危害を加えて自国領に戻っていった。」

クセノフォンと同じようにコリントス戦争を主導したのはイスメニ阿斯とアンドロクレイダス派であった。そして戦争への序章はロクリス人とフォキス人との国境紛争であったが、その国境紛争をイスメニ阿斯とアンドロクレイダス派が利用したのである。スパルタはフォキス人を支持し、ボイオティア人はロクリス人を支持したのである。

しかしクセノフォンと違う点はペルシアに買収されて戦争を始めたのではなく、国内に深刻な党派対立があり、敵対派がスパルタを利用して政権を転覆するのを予防することが目的であった。

Plut. *Lys.* 27. 1-4 :

「(1) 彼はアゲシラオスがアジアから帰ってくる前に、ボイオティア戦争に飛び込み、もしくはむしろギリシアを戦乱に投げ込んで亡くなった。というのはふた通りに言われている。ある人々は彼に責任があるとし、別の人々はテーバイの人々に、さらに或人々は両方に責任があるとしており、テーバイ人に対しては、アウリスの祭壇取り散らかしアンドロクレイダスとアンフィテオン派の人々が大王のお金を買収されてラケダイモンの人々に対するギリシア戦争を引き起こそうとしてフォキス人を攻撃し彼らの国土を破壊したことを非難している。(2) リュサンドロスについては、その他の同盟諸国が平静にしていたのに、テーバイの人々だけが戦利品の十分の一を要求し、リュサンドロスがスパルタに送った財物について立腹し、殊にアテナイの人々に三十人の独裁政治から自由になろうとする原因を提供したことにリュサンドロスが怒っていたと彼らは言っており、

三十人政権をリュサンドロスが設置し、ラケダイモンの人々が恐るべき権力を彼らに与え、アテナイから亡命した人々をいかなる地からであれ連行すべし、抵抗する人たちは協定の外に置かれた者たちとして扱うという決議を行なったのである。(3) それに対してヘラクレスやディオニュソスの行為に似つかわしい似た決議を反対に決議し、ボイオティアにあるすべての家やポリスをアテナイ人のうちで必要とする人々に開放し、連れて行かれる亡命者に支援の手を差し伸べない者は1タラントンの罰金を払わなければならない誰であれボイオティアを通過してアテナイにいる独裁者たちに対して武器を持ち込む者には、テーバイ人は見もしないし聞きもしないと決議したのであった。(4) 彼らはこのようにギリシア人らしい人間味あふれる決議を行なったのは、文字面だけで画策したのではなく、トラシュブロスと彼と一緒にピュレーを占領していた人々は、武器や資金を整えるのを密かに着手するのに手を貸して、テーバイから行動を開始したのである。リュサンドロスはそれらのことをテーバイの人々に対して非難したのだった。」